観光分野における横浜商科大学と群馬県沼田市との連携

横浜商科大学商学部貿易・観光学科教授　羽田　耕治

商学部の中に貿易・観光学科を有する横浜商科大学では、平成25年より群馬県の沼田市と観光分野における連携の取り組みを始めた。その経緯、目的、取り組みの内容、そして取り組みの意義等について紹介する。

沼田市と連携協定を結ぶに至った経緯

＜大学側の問題意識＞

観光分野における横浜商科大学（以下、本学）の地域連携の取り組み実績としては、平成25年度で４年目を迎える「かながわ観光大学推進協議会」の取り組みをあげることができる。これは、本学をはじめ県内に観光系の学部・学科を持つ４大学が神奈川県とともに負担金を拠出し、「かながわ移動観光大学」と称するセミナーを県内各地で開催したり、全県的な観光振興に関わるシンポジウムを開いたりするものである。

こうした事業とは別に特定の地域を対象に深く持続的に関わり、観光を通した地域の振興に寄与するとともに、実践的なフィールドの場を得て学生の教育効果の向上を図る場をかねてより求めていた。

＜連携協定締結の直接的なきっかけ＞

沼田市と連携協定を結ぶに至った直接的なきっかけは、本学の観光系教員（筆者）と沼田市観光交流課の観光企画主監とが旧知の間柄であったことによる。元群馬県庁職員である同主監と筆者の交流は10数年に及び、その関係の中で今回の連携の話が出た。

＜連携協定締結へ向けた沼田市側の考え＞

前記主監が沼田市長から請われて現職に就いていることもあって、連携協定締結へ向けた手続きは市長まで「トントン拍子」に進んでいった。沼田市としても観光は地域の産業経済において重要な地位を占め、その振興を図ることが大きな課題となっており、観光分野において教育・研究の実績を持つ本学との連携が実現することは、市にとって非常に意義が大きいということであった。

連携の目的と連携事項

「観光振興における連携に関する協定書」は平成25年２月19日、群馬県東京事務所において星野已喜雄沼田市長と柴田悟一本学学長が署名、締結した。同日をもって発効した協定書にうたう「目的」および「連携事項」は次のとおりである。

＜目的＞

観光分野で幅広く相互に連携を図ることにより、市の観光の振興および活力ある郷土沼田の実現を目指すとともに、大学の教育および研究のさらなる発展に資すること。

＜連携事項＞

市の観光振興に関わる施策の調査研究・立案および実施に関すること、観光分野における市および大学の人材育成事業の立案ならびに実施に関すること。

沼田市の課題と連携取り組み事業の内容

＜観光の振興に関わる沼田市の課題＞

現人口52,000人余りの沼田市は、群馬県北部に位置し、江戸時代は真田等の城下町として、明治以降は農林産物集散地、商業都市として栄えてきた都市である。観光面では老神温泉、吹割の滝、

玉原高原等々、440平方kmもの市域の中に豊富な観光資源を有する都市である。

反面、わが国の地方都市に違わず、人口減少・高齢化、中心市街地の商業機能の衰退にさらされ、観光面でも観光客ニーズの変化に対応できず、老神温泉などでは休廃業するホテル・旅館も目につく。この点、温泉観光地のにぎわいづくり、歴史的資源を活かした「まちなか観光魅力」の創出、自然系観光資源の活用方法の再構築、農林業および商工業と観光との結びつけの工夫といった課題が浮き彫りになってきている。

＜連携取り組み事業の内容＞

連携事業に具体的に取り組み始めたのは、25年度に入ってからである。その概略を記す。

①観光系教員・学生による老神温泉および市街部の現地踏査と、それを踏まえた「老神温泉および市街部におけるにぎわいづくり」に関わる課題の抽出、そして方向性の提言。これについては、折から自社の自主事業として沼田市をケースに「観光振興システム開発・研究」に取り組んでいた富士通グループとの協働作業とし、富士通グループが現地で開催した市民ワークショップに延べ３回（４，５，６月）参加した。

②観光系教員・学生による老神温泉イベントへの参加。これは巳年の今年、老神温泉の守り神と伝えられる大蛇にちなんで老神温泉で催された大蛇祭り（５月）に参加し、今回、ギネス世界記録に認定された全長108ｍもの大蛇みこしを地元の人々とともに担ぎ、温泉街を練り歩いたものである。

ワークショップの様子

③観光関連事業所でのインターンシップの実施。沼田市内の温泉旅館（１箇所）・日帰り温泉施設（２箇所）・観光施設（２箇所）・農産物および観光物産販売施設（１箇所）を受け入れ先として学生のインターンシップを延べ６泊７日の日程で行った（８月）。参加学生は12人である。宿泊先は温泉旅館の従業員寮の空き部屋を提供していただき、食事は自炊して摂った。

④来訪観光客に対する「観光利用実態把握アンケート調査」の実施。９月の連休時に延べ２日間にわたり、老神温泉のホテル・旅館宿泊客を対象に学生を調査員としてアンケート調査を実施した。この結果を踏まえて、老神温泉の活性化方策について深掘りし、提言を行うこととしている。

▌連携取り組み事業の意義と期待される効果

＜教育・研究上の意義と効果＞

今回、本学が連携先に沼田市を選んだ理由は（先に述べた「連携の経緯」とともに）、同市が城下町としての歴史文化・山岳・高原・滝・温泉・農業農村・寺社・食等々、多彩な観光資源を持ち、それだけに観光教育・研究のフィールドとして幅広いテーマの設定が可能なことが大きい。神奈川県内ではこうした適地はなかなか見当たらない。

学生にとっても普段、座学で教えられる、さまざまな観光動向や観光地の現状について、地域の現場で学ぶ、しかも観光行政の担当者や観光事業の経営者から実際に見聞きすることの意義と効果は大きい。また今回、富士通グループとともに行った市民ワークショップは、富士通グループの多数の社員の方々はもちろん、沼田市の職員、農業者、商業者、一般市民との協働作業となった。こうした人々とディスカッションすること自体が、学生達の視野や知識の拡大はもとよりコミュニケー

ション能力の向上に資するものである。さらに観光現場でのインターンシップが今後の進路選択に役立つことは言うまでもない。

＜地域にとっての意義と効果＞

沼田市にとっての意義と効果としては、まずは沼田市が観光分野で横浜の大学と連携を結び、観光振興に積極的に取り組んでいくということのマスメディアへの訴求・露出効果（これには沼田市側の巧みなメディア対応がある）があげられる。次に、そうしたメディアでの露出や「若い学生がまちなかや温泉街を歩き回り、まちの観光活性化に取り組んでいる」という情報伝播をとおした（市の観光振興への取り組みに関する）市民の意識・関心の向上効果があげられる。観光を専攻する研究者や学生の視点からの観光振興へ向けた提言を受けられる効果はもちろんのことである。

結び

本学と沼田市との連携はこれまでのところ順調に進んできている。これには、沼田市側の熱意溢れる受け入れ態勢が大きい。市長を筆頭に市役所ぐるみでの受け入れ対応が徹底されている。細かなことで言えば、本学の教員・学生が沼田市を訪れる際には、JR沼田駅への送迎は無論、市内の移動に際してすべて市が公用車（バスを含む）を用意、対応していただいている。大学と特定地域の連携を円滑に、そして効果を高めていくためには、こうした細かなレベルでの相互の配慮が不可欠と考える。市側のそうした熱意は当然、本学側の教職員にも伝わり、本学側の連携意欲も高い。

今後は、沼田市の観光分野の人材育成のために市内の高校生との交流にも積極的に取り組んでいきたいと考えている。

沼田市の大蛇まつりに参加する学生たち

【羽田耕治教授略歴】

1974年立教大学社会学部観光学科卒業、同年、株式会社日本交通公社入社。同時に財団法人日本交通公社に移籍、調査部に所属。1998年同財団を退職（退職時、地域調査室長・主席研究員）、横浜商科大学に奉職、現在に至る。

現在、神奈川県観光審議委員、真鶴町まちづくり審議会会長、かながわ観光大学推進協議会会長、京浜臨海部産業観光振興協議会副会長、日本観光研究学会常務理事等